

幼稚園教育実習による保育学生の子どもイメージの変容

Transformation of the image of the child day care student by student teaching in kindergarten

次世代教育学部こども発達学科

古田 康生

FURUTA, Yasuo

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：意味微分法（SD法），子ども観，幼稚園教育実習

Abstract：In this study, it was examined by the SD method the child view transformation of nursing students through kindergarten training. The following results were obtained.

- 1) Individual child view scores of childcare students were not significantly different before and after the kindergarten training.
- 2) It was considered a significant difference was not observed in the scores of students in kindergarten childcare practice and because it is regarded positively their children to practice before already.
- 3) It was considered a significant difference was observed in the five items, that it was involved with young children directly at the kindergarten practice has been reflected in the questions by children view score.
- 4) The questions by children view score, tended to score wide spread in both directions of the positive-negative, child view is a more specific training through kindergarten.

Keywords：Semantic differential method (SD method) children view kindergarten teaching practice

1. はじめに

保育や幼児教育を専攻し、保育士資格や幼稚園教諭免許の取得を目指す学生（以下、保育学生とする）が「子どもをどのように捉えるか」という子ども観・子どもイメージ（以下、子ども観とする）を把握することは、保育士と幼稚園教諭の養成課程カリキュラムを編成する上で有益な情報が得られると考える。

子ども観には、それまでの子どもと関わる体験の有無とその内容、成育過程の影響を受け、その結果が子どもへの関わり方・接し方、種々の問題解決への取り組み方と関連があると報告されている（市江、1992）。

現在の保育学生は子どもと接する機会が乏しいと考えられている。その理由として、第一に出生数の減少、つまり少子化にともなう地域での異学年集団による遊び仲間の減少、次いで、世帯構造の核家族化などの家族構成や社会構造的な影響などがあげられる。また、多くの学生は、幼少期の遊び内容が「三間」の

崩壊、つまり一緒に遊ぶ異年齢集団の仲間の減少、自由に遊べる空き地、遊びの空間（場所）の減少、習い事などによる遊び時間の短縮という三つの仲間、空間、時間の“間”が崩壊（前橋、2007）した世代といえる。すなわち、異年齢集団による地域の空き地で群れて遊ぶ経験をせず育ったことにより、年長者や年少者と一緒に遊んだ経験が乏しい幼少期を過ごしたと推測される。そのため、保育学生の中には保育園での保育実習ⅠA・Ⅱや幼稚園での教育実習（幼稚園実習）が初めて本格的に乳幼児と関わる機会となる学生が少なくない。これらの背景により現在の保育学生は「子ども観」が漠然としか把握できないと考えられ、保育者養成課程における種々の専門教科科目を学習する上で障壁となっている可能性は否定できない。

子ども観・子どもイメージを客観的に把握する方法の一つとして意味微分法がある。井上ら（1985）は意味微分法（Semantic Differential法、以下SD法とする）による子ども観の測定に有効な尺度を明らかにし

た。すなわち、「明るい-暗い」「やわらかい-かたい」など51組の形容詞対に多段階の評価尺度を設け、その値を得点化する方法である。このSD法を用いた子ども観の調査研究は数多く報告されている。特に看護を専攻する学生を対象にした調査研究では社会福祉や栄養、児童教育といった他領域を専攻する学生との比較による研究報告がされている。

市川ら（2009）は看護学生の子ども観を明らかにするため、社会福祉学、栄養学、児童教育学の各専攻学生が抱く子ども観と比較検討した結果、看護学生は栄養学生と比べて、子ども観を肯定的に捉え、社会福祉学生とは同等に捉え、児童教育学生に比べ否定的に捉えていると報告している。また、細野ら（2009）は、看護学生と非看護学生（社会福祉学専攻、栄養学専攻、児童教育学専攻）がとらえる子ども観の特徴を因子分析法により明らかにする試みをしている。看護学生は子どもについて肯定的側面と否定的側面の両側面ともに内面的・外見的イメージの両面で捉える傾向があるが、社会福祉学と栄養学を専攻する非看護学生では、子どもについて肯定的で外見的イメージを優先する傾向がある。児童教育学を専攻する学生では子どもについて内面的イメージを優先し、養護の必要な庇護する存在であるととらえる傾向があると報告している。しかし、これらの子ども観は小児看護などの臨地実習により変化することが報告され、看護学生を対象とした先行研究では、小児看護実習前は否定的なイメージを乳幼児に対して抱いていたが、小児看護実習後は肯定的イメージに変化したと報告されている（細野ら、2009、草間ら、1997）。

保育学生を対象にした調査研究では、幼児との運動遊びを中心とした一過性の直接的な交流と半年間で4回の交流の結果報告がある（古田、2013a、古田2013b）。古田（2013a）は、保育学生を対象にSD法を用いて子ども観を調査した結果、幼児との一過性の運動遊びであっても得点幅が広がり、より子どもに対するイメージが具体化すると報告している。また、7か月間に4回の「親子運動遊びの広場」に参画した保育学生の子ども観は肯定化し、子ども集団との直接的な関わりが子ども観を具体化及び肯定化させたと報告している（古田、2013b）。

これらの保育学生を対象とした研究報告は、一過性または定期的な乳幼児との直接的な関わりにより肯定的に変容すると報告しているが、保育実習や教育実習（幼稚園）（以下、幼稚園実習とする）のような一定の期間を連続的に関わるような種々の実習において子

ども観がどのように変容するかは、未確認である。つまり、保育士・幼稚園教諭養成課程では保育士資格及び幼稚園教諭免許を取得するため保育・教育現場での実習が必修であり、保育士であれば、保育実習ⅠA（保育所）、保育実習ⅠB（施設）、保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（施設）でそれぞれおおむね10日間（90時間）、幼稚園教諭免許であれば、教育実習（幼稚園）で20日間の実習を履修しなければならない。これらの実習により、子ども観変更は十分考えられ、確認する必要がある。

そこで、本研究では、長期の幼児教育現場での実習により保育学生の子ども理解や子ども観を客観的の変容を把握し、保育者（保育士及び幼稚園教諭）養成課程カリキュラムの充実に役立てるため、幼稚園実習による保育学生の子ども観の変容を調査することを目的とした。

2. 研究方法

（1）調査対象者

対象者は、岡山県A大学の保育士・幼稚園教諭養成課程3年次に在籍する保育・幼児教育専攻学生50人（男子学生20人、女子学生30人）とした。対照学生として体育・スポーツ学を専攻する学生（以下、体育学生とする）30人を対照群とした。

なお、本研究の対象学生となった保育学生は3年次学生であり、既に保育実習ⅠB（施設）、保育実習ⅠA（保育所）を経験している学生であった。

（2）幼稚園実習内容

1) 実習期間：平成25年9月2日（月）～10月31日（木）の期間内の20日間

2) 実習内容：観察実習、指導実習

（3）SD法による子ども観の調査方法

1) 調査時期：

保育学生のSD法による子ども観の調査は、幼稚園実習が始まる前の平成25年8月2日に1回目の調査を実施し、対象学生の全員が実習を終了した平成25年10月10日に2回目の調査を実施した。調査は、質問用紙を配布した後に回答方法の説明を行い、回答終了後にその場で直ちに回収した。

2) 質問項目：

市川ら（2009）や細野ら（2009）が看護学生の子ども観を調査した方法を用いた。つまり、井上ら（1985）が子ども観の測定に有効とした

51組の形容詞対を用い、それぞれの形容詞対の質問項目に対して、7段階の評価尺度から選択させる方法である。「明るい-暗い」などの51組の形容詞対の質問項目について最も肯定的イメージであれば7点、最も否定的イメージであれば1点と回答させた。

3) 分析方法

調査対象者となった保育学生の個々から得られた51組の形容詞対ごとの総得点平均値である子ども観得点（以下、個別子ども観得点とする）と51組の形容詞対の質問項目ごとの平均値（以下、質問項目別子ども観得点とする）をそれぞれ集計し、平均値及び標準偏差で表して分析の対象とした。

4) 倫理的配慮

調査を開始するにあたり、本研究の手順と主旨を口頭及び文書にて説明した。特に、回答の義務と個人情報に関しては、①回答は義務でない、②回答は途中でであっても中止できる、③回答しないことによる不利益はない、④回答による個人情報は守られ、研究成果として公表するにあたり個人が特定されることはない、と説明した。その後、同意が得られた対象者のみに質問紙に回答を記入させた。

(4) 統計処理

質問紙調査により個別子ども観得点と質問項目別子ども観得点の平均値と標準偏差を得た後、保育学生の幼稚園実習の前後で得点平均値に差が認められるか是对応のあるT検定を用いて検討した。また、実習前の個別子ども観得点と質問項目別子ども観得点の得点レベルを把握するため、他領域（体育学生）と比較し、統計的な有意差をU検定により検討した。統計処理にはエクセル統計2000を用いた。

3. 結果と考察

本研究は、保育学生の子ども観が幼稚園実習（20日間）によりどのように変容するか把握し、その結果をその後に続く専門教科教育と保育実習に役立てることを目的とした。

表1 幼稚園実習前・後の個別子ども観得点

	実習前	実習後	
保育学生	5.38±1.49	5.47±1.39	n.s.
体育学生	4.43±1.77		

(1) 51組形容詞対について個別子ども観得点平均値とその変容

保育学生の幼稚園実習前・後および対照群の体育学生のSD法による個別子ども観得点を表1に示した。保育学生の実習前得点（5.38±1.49）と実習後得点（5.47±1.39）には統計的な有意差は認められなかった。しかし、両値とも体育学生（4.43±1.77）と比べ高値であり、幼稚園実習前の段階で保育学生と体育学生の個別子ども観得点には統計的な有意差が認められた。

個別子ども観得点は、質問項目ごとの子どもに対する肯定的イメージと否定的イメージを表している（市川, 2011）。すなわち得点の増加は肯定的に変容したことを意味し、減少は否定的に変容したと考えられている。

今回の調査では個別子ども観得点が0.09ポイント増加したものの統計的な有意差は認められなかった。その理由として実習前の初期値が影響していると考えられる。すなわち、実習前の同じ時期に調査された対照群（体育学生）より有意に高値を示していることから、これまでの2年間の専門教科教育および保育実習IA（保育所）と保育実習IB（施設）により子ども観が肯定的になっていたため幼稚園実習前後で個別子ども観得点に有意差が認められなかったと考えられる。

古田（2013a）は、幼児との一過性の運動遊び交流により保育学生の個別子ども観得点が4.90から5.15に0.25ポイント増加したことを報告している。同様に、4回（7か月間）の親子運動遊びの広場に参画した保育学生の終了時の個別子ども観得点は5.27±1.47であったと報告している（古田, 2013b）。また、市川ら（2010）の看護、社会福祉、栄養、児童教育を専攻する学生を対象とした報告では、児童教育を専攻する学生は他の学生と比較して高い得点傾向であったと報告している。加えて、市川ら（2010）による先行研究では、（個別子ども観得点の）平均得点4.0以上の学生がそれぞれ看護学生では72.5%、栄養学生62.7%、社会福祉学生72.5%、児童教育学生80.4%と報告しているが、本研究では、調査対象となった全ての保育学生が4.0ポイント以上であった。

これらの報告を考慮すると今回対象となった保育学生の個別子ども観得点は幼稚園実習前の段階で既に高レベルであり、子どもを肯定的に捉えていたために得点の増加幅が小さくなったと考えられた。

(2) 質問項目別子ども観得点で実習前に対照群と差が認められた項目

表2は保育学生の幼稚園実習前と体育学生に有意差が認められた項目の一覧である。26項目に有意差が認められた。

(3) 個別子ども観得点のヒストグラム

図1は、幼稚園実習前・後と体育学生の個別子ども観得点のヒストグラムである。実習前・後とも、得点区分5.0～5.5点が最頻値であったが、実習前に比べて実習後は高得点区分が増える傾向が見られた。つまり、個別子ども観得点の分布が高値へ移行し、肯定化

表2 体育学生と幼稚園実習前の保育学生の質問項目別得点

体育学生と比べ有意に肯定的な項目	明るい-暗い, 積極的な-消極的な, 活発な-不活発な, 好き-嫌い, 親切-不親切, 気持ち良い-気持ち悪い, おしゃべりな-無口な, 素直な-わがままな, 外向的な-内向的な, 元気な-疲れた, 幸福な-不幸な, 楽しい-苦しい, 理性的な-感情的な, 意欲的な-無気力な, かわいらしい-くだらない, 丸い-四角い, 強気-弱気, すばやい-のろい, 豊かな-貧しい, はっきりした-ぼんやりした, 新しい-古い, まとまった-ばらばらな, あつい-冷たい, 生き生きした-生気のない
体育学生と比べ有意に否定的な項目	陽気-陰気, 激しい-穏やかな, 思いやりのある-思いやりのない

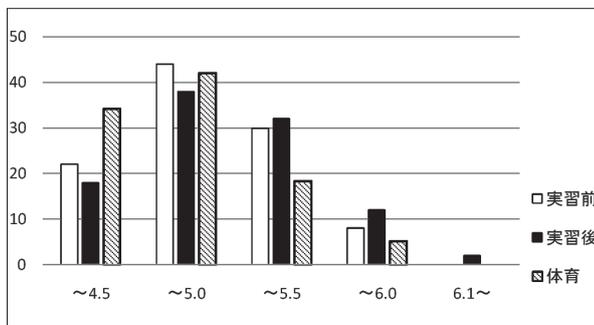


図1 幼稚園実習前・後の個別子ども観得点ヒストグラム

にスライドする傾向が認められた。看護学生を対象とした先行研究(細野, 2009)では、小児看護実習前では乳幼児に対して否定的イメージであった看護学生が、実習後に肯定的イメージに変容するという報告もある(草間, 1997)。本研究結果は、幼稚園実習にて保育学生の個別子ども観得点が肯定化したことから幼児との直接的な関わりが肯定的な変容をもたらすことが実証的に確認された。

(4) 幼稚園実習前・後の質問項目別子ども観得点パターンの変容

図2に、幼稚園実習前・後での質問項目別子ども観得点パターン(折れ線グラフ)の変容を示した。幼稚園実習前と後では同様な子ども観得点パターンを示す結果となった。つまり、実習前後で特定の形容詞対で得点差が生じ、特異的な変容をするのではなく全体的に肯定化する傾向を示した。

幼稚園実習前後にて、全ての質問項目の総得点平均値(個別子ども観得点)には統計的有意差が認められなかったが、個々の質問項目別で比較したところ5つの質問項目別得点に統計的有意差が認められた。「明るい-暗い」と「やわらかい-かたい」は否定的に変容し、「強い-弱い」、「ちゃんとした-ちゃんとしてない」「すぐれている-すぐれていない」では肯定的に変容した。これらの結果は直接幼児と関わることでよりそのイメージが変容したと考えられる。つまり、漠然とした幼児は「明るい」というイメージが直接的な関わりにより、そうでない時や場合もあることに気づいたことが得点として反映されたと推察される。

4. まとめと今後の課題

本研究では、幼稚園実習にて連続的に幼児と関わることで保育学生の子どもの観の変容をSD法により検討

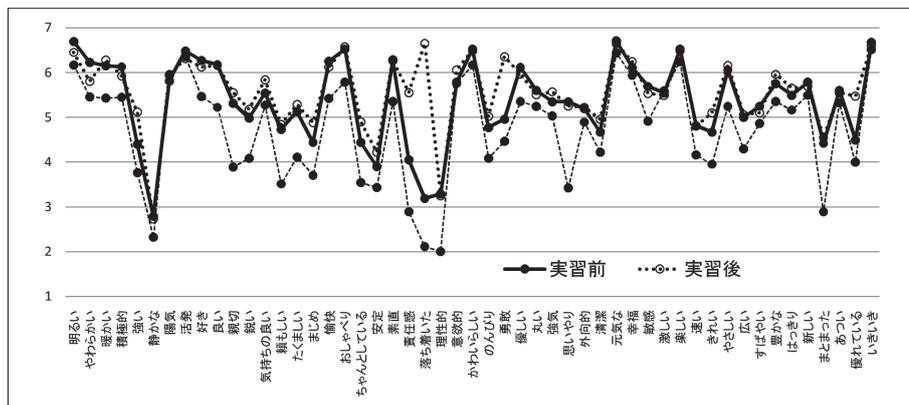


図2 実習前後の質問項目別子ども観得点平均値パターン

することを目的とした。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1) 本研究で調査対象となった保育学生の個別子ども観得点平均値は幼稚園実習の前後で有意な変容は認められなかった。
- (2) 幼稚園実習で個別子ども観得点に有意差が認められなかったのは種々の専門教科の学習や保育実習などにより子どもを肯定的に捉えているため、実習前得点が高値であったことが影響していると考えられた。
- (3) 保育学生の質問項目別子ども観得点では5つの項目に有意差が認められ、幼稚園実習にて直接幼児と関わったことが反映されたと考えられた。
- (4) 幼稚園実習を通して質問項目別子ども観得点は、肯定・否定の双方向に得点幅が広がる傾向を示し、子ども観がより具体化された。
- (5) 本研究の調査では個別・質問項目別子ども観得点の変容に幼稚園実習の何が影響したかは明らかにできない。そのため、自由記述などによるエピソード記述をさせ、得点変容との関連を調査しなければならない。

5. 付記

本研究は、平成25年度環太平洋大学学内特別研究費の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は、日本保育学会第66回大会で発表した。

6. 謝辞

本研究の実施にあたり調査にご協力いただきました対象者の皆様に心からお礼申し上げます。

また、研究を進めるにあたり、多大なご助言をいただきました次世代教育学部こども発達学科長 勝田麻津子教授に心から感謝申し上げます。

7. 参考文献・引用文献

古田康生, 保育学生の子どもイメージ - 運動遊び交流による変容 -, 日本保育学会第66回大会発表要旨集 492 (2013a)

古田康生, 幼児との運動遊び経験が保育学生の子ども観に及ぼす影響 - 運動遊び交流と保育所見学の比較 -, 日本幼児体育学会第9回大会研究発表抄録集, 74-75 (2013b)

井上正明, 小林利宜, 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観, 教育心理学研究33: 253-260 (1985)

細野恵子, 市川正人, 上野美代子, 看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較, 名寄市立大学紀要3: 79-86 (2009)

市江和子, 看護学において看護学生が子どもに対してもつイメージの変化 - 小児看護学学習前後におけるイメージ形成要因 -, 第28回日本看護学会集録 (看護教育), 140-142 (1992)

市川正人, 細野恵子, 上野美代子, 看護学と他学科学学生の乳幼児に対するイメージの比較, 名寄市立大学紀要3: 87-93 (2009)

市川正人, 細野恵子, 看護系大学生のもつ乳幼児に関するイメージの変化 (第1報) - 小児看護領域学習前後の比較による学習効果の検討 -, 名寄市立大学紀要5: 21-26 (2010)

近藤剛, 高齢者とともに学ぶレクリエーション指導演習の効果, 自由時間研究38: 40-48 (2012)

草間美根子, 寺田敦子, 今福ひとみ, 福池ゆかり, 杉本暁子, 大久保薫, 酒見敬子, 中淑子, 内海滉, 小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容 - 病棟実習と保育所実習の因子分析的検討 -, 第28回日本看護学会集録 (看護教育), 143-145 (1997)

前橋明, 子どもの生活と運動, 幼児体育理論と実践, 大学教育出版 (岡山), 12-18, 2007